

日本音楽学会国際研究発表奨励金受領報告書

樋口騰迪（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程在学・西日本支部）

1.学会について

学会名称：国際学会 *Le musicien japonais en France ou les rapports France-Japon*（「フランスにおける日本人音楽家：音楽界における日仏関係」）

開催日：2016年2月4-6日

場所：パリ国立高等音楽院（4,5日）、パリ第4大学（6日）

「本プロジェクトでは、明治期から今日までのフランスの音楽界（音楽機関、作曲家、演奏者）が日本人音楽家に与えた影響について、日仏間の音楽関係の歴史を構成する以下の4項目を中心テーマとし、議論を展開する。

- ・ 作曲と音楽制作
- ・ 演奏
- ・ 音楽学
- ・ 音楽教育

日本人音楽家がフランスへ来て何を学ぶのか。単なる技術の習得のためなのか。若い音楽学生が日本で享受した音楽教育を完遂するために、フランスを選ぶというのは何故か。

「国民的」作曲技法と言うべきフランス独自の作曲技法の特異性というもの存在するの
か。その点において、フランスの重要な音楽教育機関はどのような役割を担っているの
だろうか。これらの問題点は上記の四テーマの中で問いかけており、そしてその思索は、
日仏両文化間の歴史をより深く結びつける材料（きっかけ）となるはずである。」

というテーマのもと、日仏の音楽学者だけでなく、作曲家や演奏家も大会委員、発表者、
フロア聴衆として参加した。

発表者は計18名、フランス・日本双方9名ずつであった。大まかな傾向としては、フランスの発表者は特に日本の「現代音楽」作曲家とフランス音楽とのかかわりということがトピックとして好まれていたようである。日本側の発表は、やはり洋楽受容史の一側面をフランスとのかかわりに特化して、というのがほとんどであった。一見すると非常に微視的なテーマの学会のように思われるが、日本の洋楽史とフランスということだけからしても非常にいろいろのアプローチが考え得るのであって、必ずしもフランス音楽研究、日本音楽研究に特化しない研究者にも、大いに意義のあるものであったと思う。

2.報告者の発表について

セッション：Dans le chant et la chanson

発表日時：2016年2月4日 17:15-17:45

発表タイトル：L'histoire de l'acceptation de la «chanson française» au Japon: Focus sur la théorie de la composition musicale et œuvres de Tōroku Takagi（日本におけるシャン

ソン受容史 ——高木東六の作曲理論と作品を中心として)

・発表要旨

報告者は、18世紀末におよそのスタイルが形作られたと考えられるパリの都市民謡が、様々の音楽の影響を受けながら、1920年代に大衆音楽ジャンルとしての「シャンソン」へと変化していく過程を、旋律様式の変化を中心に考察している。

この方法論を、日本の大衆歌謡の成立史にも適応し得るのではないかと考えている。つまり、日本でも、素朴な様式の歌謡が、クラシック音楽や外来音楽の影響を受けながら、変質してきた過程が、「シャンソン」に近い形で見いだされるのである。

1930-60年代にかけて、日本でも「シャンソン」が広く人気を博したことがあった。このシャンソンの受容は、かなり特異な性格を帯びており、かつ日本の大衆歌謡にも大きな影響を与えた。

本発表の前半では、日本におけるシャンソンの受容のあらましを「宝塚・レコード・映画」の3つのトピックに分けて紹介しつつ、その独特の性格を明らかとした。特に日本に於いて「シャンソン」が、舶来上等の高級文化のうちに組み込まれ、特にインテリ層を中心に疑似クラシック的性格を以て歓迎されたことを指摘した。またそうしたことから、「シャンソン」が本来有する風刺性や官能性というものが全く排除されて受容されたのである。

後半は、戦前からシャンソン紹介の主要な先導者のひとりであった作曲家・ピアニスト高木東六(1904-2006)の活動をフォーカスすることで、更に具体的に日本の大衆音楽に「シャンソン」の与えた影響を分析した。高木東六は1928年から1932年にかけてスコラ・カントルムへ留学し、帰国後、ピアニストとしては近現代フランス音楽の演奏家として、作曲家としては朝鮮をテーマにした民族的な作品や、タンゴなど新しいリズムを取り入れた作品などを書いて活躍した。戦争中活動を縮小しながらも、戦後グランド・オペラ形式の歌劇《春香》などを作曲するが、《水色のワルツ》などによって、ポピュラー音楽の作曲家として認知されている。

彼は自らの流行歌作曲のベースはシャンソンであると公言し、当時例の無かったポピュラー音楽の作曲理論書も著した。こうした彼作曲理論やそれに基づく作品は、疑似クラシック音楽的なシャンソン受容の在り方を、具体的に示すものであると考え、特に取り上げた。こうした理論に裏付けられた彼の作品は、非日本的な音楽語法で書かれた戦後大衆歌謡のさきがけをなしたと考えられる。そうした新たな作品の誕生に、「シャンソン」の影響が濃厚に働いたことを指摘した。

・反響、感想など

本学会では、それぞれの発表のあと各セッションごとにまとめて自由なディスカッションの時間を取るスタイルであった。日本においてフランスの「シャンソン」が有した特殊な意義、またその日本大衆音楽への影響については、参加者から積極的な反応を得ること

が出来た。「シャンソン」と言う音楽の定義はフランス本国でも実際曖昧なものであるから、つまりそれは日本の「演歌」というものとイコールなのか、という質問もあった。これはそういう側面もあるし、しかし全くそうでない部分もある、と言うよりほかない。報告者にとって、想定範囲内ではあったけれども、しかしその熱心さにおいては意外だったのは、シャンソン受容の先鞭をつけた「宝塚」に多くのフランス人が関心を抱いたということである。オペラでもなくミュージカルでもなく、フランスのルヴュでもない「宝塚」の日本的特異性を、筆者の語学能力では十分に説明し得なかったのは忸怩たる思いがあるが、しかしこうしたいわば「ガラパゴス化」した日本の西洋文化について、外国語で発信してゆくことの重要性を、他の参加者と改めて確認し合ったことでもあった。

また他のセッションを聴いての印象としては、フランスにおける日本研究は、フランス語のみを用いてフランスの方法論を適用し一方的に進めるものから、日本語の文献を的確に読みこなし、十分に資料にもあたった研究が多く出てくる移行期にあるように感じた。細かいことだけれども、戦後日本の作曲家とフランスと言うと、何かとメシアンが話題の中心になるが、フランスの発表者からはしばしばジョリヴェの名が聞かれたのは、昨今日本ではあまり言われなくなったこの作曲家を思うと、着眼の相違と言う意味でも興味深く、特に指摘しておきたいと思う。

学会全体の印象としては、フランス語・英語両方が発表言語として採用されていたものの、実際はディスカッションのほぼすべてがフランス語で行われ、すべての参加者が等しく議論に参加出来たとは言えない。これは特にフランス側のオーガナイザーに、それなりの責任が求められよう。司会者の独壇場、というような場面も、しばしば見られたからである。来年は日本に場所を移して開催されると既に予告されているが、運営については大いに反省すべき点があると思う。

上記の通り、海外での日本研究もかなり発達し、高度な日本語能力に基づいてハイレベルな研究が数多く出てきている。事実、日本への留学経験も無くかなり自由に日本語を駆使するフランス人研究者に報告者は驚かされるどころとなった。しかし未だに異国趣味的着想による、かなり幼稚的な日本理解に基づいた研究が散見されるのも事実である。しかしながら外国人研究者による日本研究を無批判に崇拝する傾向が、伝統的に本邦においてはかなり強かったのではある。こうした状況下にあって日本人研究者は、たとえ自身の主たる研究対象を外国におくとしても、そこで導き出し得た方法論を適用し、積極的に日本の研究をも行うことが求められるだろう。そうして何よりも重要なことは、その成果を英語なりドイツ語なりフランス語なり、外国語によって積極的に発信してゆくことだと報告者は感じる。こうしたことは、ひとえに日本研究を充実したものとするだけでなく、日本の各学問分野それ自体の成熟にもつながると思われる。今回こうした助成を得てはじめて海外で発表する機会に恵まれたことは、筆者にとってこうした決意を固める良い機会と

なった。今後も積極的に海外に出て、自身の博士論文のテーマであるフランスの「シャンソン」のことはもちろんであるが、その方法論を適用した日本歌謡曲との比較研究を公表して、不断に内外にその成果を問うてゆきたいと思っている。

末筆ながら、このような貴重な機会を与えてくださった住友生命保険相互会社様ならびに日本音楽学会に改めて心から感謝を申し上げたい。